

# TS転生エルフの 異世界性生活

～荒くれ者たちに全ての孔を  
開発されて雌になる～



脳を激しく揺さぶるような眩暈のあと、突如として溢れ出したのは、満員電車で揺られ、上司の理不尽に耐え、ただ平穏を求めている冴えないアラサーサラリーマンとしての記憶だった。

（嘘だろ、死んだのか……？なんで…？いや、それよりここは…）

混乱しながらも、ふと足元に目を落とす。

そこには透き通った水を湛えた、美しい湖の岸辺だった。

吸い寄せられるように水面を覗き込んだ瞬間、思考は完全にフリーズした。

水面に映っていたのは、くたびれたスーツ姿の男ではない。

信じられないほど透き通った白い肌。

絹糸のようにサラサラと流れる、神秘的な金の髪。

そして、髪の間隙からピコピコと覗く、特徴的な長い耳

「これ、エルフってやつ……！？っていうか——」

自分の頬に両手を当て、水面に顔を限界まで近づけた。

パチパチと瞬きをするたびに、長い睫毛に縁取られたエメラルドグリーンの瞳が、潤んだようにキラキラと輝く。

驚きに開いた薄い唇は、桜の花びらのように淡く色づいていた。

「ボク、めっちゃ可愛いじゃんっ……！！」

前世の記憶があるせいで客観的に見てしまうが、

控えめに言って超絶美少女である。

嬉しくなって思わずその場でぴょんぴょんと跳ねてみると、細い身体に合わせて、

小ぶりの胸が、衣服の布地を押し上げるように「ぷるん」と健気に揺れた。

「すご、揺れた？揺れたよね？！ちょっと、小さいような気もするけど、柔らかい！……ひゃんっ！？」

おそろおそろ胸に手を当てて確かめてみると、ほっそりとした指がマシュマロのような柔らかな乳房に沈む。

前世の記憶にはない、脳を痺れさせるような甘い快感が背筋を駆け抜けた。思わず変な声が出て、自らの口を手で押

さえる。ただ声を漏らしただけなのに、上目遣いになった自分の表情は、男の庇護欲を極限まで煽るような、破壊的な破壊力を持っていた。

（いやいや、これ、この容姿でこの身体はヤバいでしょ……！ どんな服着ても似合っちゃうやつ）

湖を鏡代わりに、髪をかき上げてみたり、あざといポーズを取ってみる。そうっと短いスカートも捲って見たり…、

とドキドキしながら際どいところまでいったところで手は止まった。なんせこの男、精神はピッカピカの童貞だからである。

——なんてはしゃいでいたのは、半年前のことだ。

ここは冒険者ギルド。汚れきったその場所に、およそ似つかわしくない『神聖な美』が迷い込んできた。

「こんにちは！」と、鈴を転がすような声で愛想よく、建付けの悪い扉をくぐったのは、透き通るような肌と長い耳を持つ、世間知らずのエルフの美少女だ。

瞬間、ギルド内を支配していた下品な怒号が、水を打ったように静まり返る。

ギラついたハイエナのような視線が一斉に彼女の華奢な身体へと注がれ、あちこちのテーブルから、ゴクリと唾を飲み込む音が漏れた。

するとひとときわ体格のいい男がエルフの少女の目の前に現れる。無精ひげをこさえた筋骨隆々の男だ。

「おう、レティじゃねえか」

「あれえ？今日も奢ってくれるの？」

「おいおい、出会い頭に随分じゃねえか、まあ、あんたみたいな美人なら喜んで奢ってやるぜ」

「やったあ♡」

大きなエメラルドグリーンの瞳をキラキラと輝かせながら、ガタイの良い冒険者の男と親しげに言葉を交わす。

通りすがりの者たちが思わず振り返ってしまう程の美貌——レティ。

エルフは非常に希少な種族であった。深い森に集落を作り、自然を愛しひっそりと暮らしている。

プライドが高く排他的、人間などの他種族を見下す傾向があり、滅多に森の外に出ない。その中でも彼女の性格は異質中の異質であった。

なにせ彼女は、前世は日本のサラリーマンで重度のオタクだったのである。

陰キャではあったが、このファンタジー世界に転生し、美少女に生まれ変わったことで自信が付いたのか、とんでもない陽キャになってしまった。

そして日本より圧倒的に娯楽の少ない異世界、特にエルフの里は、日本に住んでいた彼、もとい彼女にとっては非常に退屈だったのだ。

意を決して里を飛び出し、多種族の住まう街へと繰り出すやいなや、非常に注目を浴びた。街の門番、店の従業員、宿屋の女将、冒険者ギルドの受付——強制的に会話をせざるを得ない状況になり、最初は緊張しつつも、そこは元・日本のサラリーマン。

前世の営業で培われた『愛想笑い』と『ビジネスマナー』を全力で発動した。

「此処まで愛想のいいエルフは珍しい」と街では噂になり、誰からも愛される（と本人は思っている）新人冒険者となったのである。

里を飛び出してから季節は二つ過ぎており、今は初夏で、じつとりと肌に張り付くような湿り気のある気温である。

そんな中、冒険者ギルドに併設されている酒場で賑やかな声が湧き上がった。

「「「かんぱーい！」」」

「今日の稼ぎはどうだった？」

「ぼちぼちかなあ」

「ぼちぼち？」

「あっ、えーと、まあまあいい感じ！まあ、ボクの魔法にかかれば楽勝だよ」

（ぼちぼちは通じないかあ）

「流石だなあ。ランク上がるのも時間の問題なんじゃないか？」

「うん、近々上がるかも、あと…いち、にい、さん…何回？わかんないけど、その内？上がるかなあ？」

「なんだよそれ、適当だなあ」

男たちがドッと下品に破顔する。

レティはエールをちびりと口に含み、ふふんと得意げに胸を張った。白くハリのある胸元が、初夏の薄着からぷるんと揺れる。

男たちのギラついた視線がそこに集中していることなど、世間知らずでポジティブな彼女は微塵も気づいていない。

（あ〜、やっぱり異世界の酒場で仲間と飲むエールは最高だなあ！ 前世の接待ゴルフに比べたら、

気のいい人たちとバカ騒ぎする方が100倍楽しいし、ボクってば完全にこの世界の『愛され新人美少女冒険者』のポジション確立しちゃってるよね）



「いやあ、それにしてもレティちゃんはノリが良くて助かるぜ。エルフっていうのは、どいつもこいつもいけすかねえ奴らだと思っていたが、あんたみたいなやつもいるんだなあ」

「あはは、あいつらマジで陰キャだからね！ 異世界の……あ、いや、里の文化はちょっと閉鎖的すぎるっていうか、もっと他種族交流イベント（飲み会）とか積極的に参加すればいいのにね～」

たどたどしい口調でノリ良く返すレティに、男たちは顔を見合わせ、その醜い口元を「ニヤリ」と歪ませた。

「そうだな。インキャ？っていうのはよくわからんが、じゃあ、他種族交流を深めるために、とっておきの高級酒を注文してやろうじゃねえか。おい、マスター！ こいつに特製の『夜咲き花の蜜酒』を出してくれ！……お前みたいな綺麗なエルフにぴったりの、フローラルな甘い酒だ」

「えっ、なにそれ、美味しそう～！ やったあ、先輩たち大好き♡」

レティは大きな宝石のような瞳をさらに輝かせた。

彼女が前世のオタク知識をいくら持っていても、ここは本物の『肥溜め』だ。

運ばれてきた琥珀色の甘いお酒の底に、男たちが手慣れた動作で仕込んだ「怪しげな白い粉」が完全に溶け込んでいることなど、知る由もなかった。

「ほら、冷えてるうちにグツといってくれや」

「うん！ いただきまーす！」

ぐび、ぐび、と喉を鳴らして、無防備に甘い毒を飲み干していくエルフの美少女。

男たちはジョッキを傾けながら、彼女の華奢な首筋や、スカートの奥に隠された秘密の割れ目を、すでに完全に値踏みするように見つめていた。

「ふはぁ、あまくて美味し——……。あれ？ なんだか、急に頭がふわふわして、眠く……」

「おうおう、どうしたレティちゃん？ 疲れが出たか？」

「う、うん……ちょっと、クエスト頑張りがちだった、かなあ……。少しだけ……おやすみ、なさい……」

どさ、と木製のテーブルに突っ伏し、エメラルドグリーン  
の瞳が完全に閉じられる。

数秒前まで無邪気に笑っていたレティは、完全に無防備な  
肉体となって眠りこけた。

「……おい、大丈夫か？」

「ね…むい」

「俺たちが運んでやるから、気にしないで寝てな」

「んう～、ありあと」

レティは完全に眠りに落ち、寝息を立てはじめる。そんな  
彼女を男は軽々と横抱きする。

周りの男たちが「なんだ、今日もか、お盛んだねえ」とは  
やし立てる。

古びたベッドにレティの肢体を横たえる。

すうすう、穏やかな寝息を立て、小さく上下する胸元、はだけた太ももに、周りを取り囲む男たちはゴクリと固唾をのみ込み下腹部を熱くした。

「今日もちろいねえ、さあて、失礼しまあす」

呑気に眠りこける美しい少女のスカートを男たちのゲスな手が、まくり上げる

布の擦れる音が淡々と木魂し、クールビズ仕様の薄い布地をがばりと大胆に剥くと、

白くハリのある乳房がぷるんと露わになった。

けしてグラマーとはい言難いが薄ピンクの突起が愛らしく乳房には女性特有の柔らかさがあり、何よりも肌にハリがある。

この街を訪れたとき、彼女は永遠の17歳だよっ☆なんておちゃらけていたが、

実際、エルフは長寿種であるため永遠の美少女というブランドがあるのだ。

当初はこの肥溜めのような場所にまさか

軽快にスキップしながら街に出てくる美少女エルフが来る  
とは誰もが予想にしていなかっただろう

恐る恐る声をかけてみれば戸惑いながらも、ニコッと笑い  
かけてくる彼女に誰もが見惚れたことだろう

愛想が良く好奇心旺盛なエルフである。

誰に対しても分け隔てなく接するし、ノリも良い、たまに  
言っていることがよくわからないところもあるがそれは些  
細なことである。

エルフという種族は独自のコミュニティを形成し、閉鎖的、  
それと同時に警戒心が強い、

ダメ元で睡眠薬を入れたらまんまと騙されてくれたところ  
から始まり、次第に彼等の行動はエスカレートしていった。

あの夜からこれは仲間たちの間では恒例となった。

白くほっそりとした太ももからパンティを抜いたらぴち  
りととじた膣口が目に入る

ばかりと大きく足を広げるとむわりと汗と甘酸っぱいそれ  
が鼻腔を擦った。

男は肉厚の舌を割れ目に差し込み舐めしゃぶる。

ぴちゃっぴちゅっ、ちゅばっ、ちゅばっ、じゅるううう

「んうっ……ふ、う」

「じゅるっ、じゅるっ、じゅるるうううう、ふはあっ、初夏のむれむれおまんこ塩気が効いてうめえ」

ぴくっ、ぴくん、と華奢な体が震える。寝ていても感じているようだ。

ピンッと立ち上がっている乳首をどこからともなく伸びた手が、右、左とそれぞれ弄ぶ。

「あッっ、あ…………あふ…………」

くにゅんっ♡こりこりっ♡と指先で遊んでやれば小さく首をふるりと左右に揺らし、小さな唇からは鈴を転がしたような嬌声が漏れる。

全員がその声を熱心に耳をそばだて、彼女の挙動に釘付けになる。

「今日もレティちゃんの大好きなおちんぼ沢山食わせてやるからなあ」

愛液が割れ目がじゅわりと滲む。犯される準備は万端というところだろう、ボロンと赤黒い欲を出して、早速膣口に挿入しようと、

先走の滴る先端でぬちぬちと入口をノックする。